

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題：

学生の病院実習における患者とのコミュニケーションの認識

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二重作, 清子, 谷岸, 悦子, 本田, 多美枝, 小島, 通代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000128

著作権は本学に帰属する。

地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題 —学生の病院実習における患者とのコミュニケーションの認識—

State and Future Problems of Basic Nursing Practice in The
Community : Nursing Students' Recognition for Importance of
Communication in Hospital Practice

二重作清子 谷岸悦子 本田多美枝 小島通代
Kiyoko Futaesaku, Etsuko Tanigishi, Tamie Honda, Michiyo Kojima

日本赤十字九州国際看護大学
The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

要旨

本研究の目的は、地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題を明らかにするために、健康障害を持ち病院に入院している人を対象にした基礎看護学実習において受持対象者との関係性に影響するコミュニケーションについての認識を、課題レポートを通して明らかにしたものである。研究方法は、基礎看護学実習終了後に学生が提出した課題レポートの中で、受持対象者とのコミュニケーションに視点をあてて分析した。学生は、実習当初は緊張感や不安感から対象者とのコミュニケーションを難しさとして認識していたが、対象者に適した看護を実践するためには対象者との関係を築くことが重要であり、その基本となるのはコミュニケーションであるとの気づきから、自己の振り返りをし、対象者との良好な関係が形成できるようになった。今後の方向性として、対象者とのコミュニケーションは人間的交流が根底にあることを認識できるような教育的な関わりの必要性が示唆された。

キーワード：基礎看護学実習、学生、患者、関係、コミュニケーション

はじめに

看護場面におけるコミュニケーションは、患者との対人関係づくりに影響する。患者の本当の要求を汲み取り、患者の心に寄り添うコミュニケーションが重要である。

しかし、学生の意思、考えを相手に伝え、それによって他人に影響を与える程度に内容

を交換することは難しい¹⁾。看護学生にとって、受持対象者とのコミュニケーションは難しいと認識されがちである。不安や緊張から、心に思っている言葉に表出できなかったり、難しさを実感するだけで話したい内容が伝わらない場合も多い。

本学では初めての看護学実習を基礎看護学実習Ⅰとして、地域で生活する健康な人を対象に1年前期後半に実施している。先行研究²⁻⁴⁾で述べたように、実習前において学生は、実習イコール病院実習として認識し、地域での実習ということに戸惑いや不安があったが、実習の進行とともに、学生は人と向き合い、対話することの大切さ、健康は個別に異なることの発見、個人の日常生活が健康や環境と関連すること等、多くの学びを得ていた。また、対象者から笑顔で迎えられたことや、学生を家庭に迎え入れられた経験から、看護をめざす者としての態度を学び、それらを含めて今後の課題としていた。しかし、実習終了後のまとめの報告会や課題レポートにおいて、学生の多くは、2年次前期に開始される健康障害を持ち病院に入院している人を対象にした基礎看護学実習Ⅱに対して、受持対象者とのコミュニケーションについて不安があるとしていた。

実際の基礎看護学実習Ⅱでは、実習当初は、対象者とのコミュニケーションに対して困難さがあったが、実習の進行とともに対象者に適した看護を実践するためには対象者との関係性を築くことが重要であること、その基本となるのはコミュニケーションであると気づき、対象者との良好な関係を形成し、維持できるように変化した⁵⁾。

本研究は学生が対象者との関係性を形成する基となったコミュニケーションに焦点をあて、基礎看護学実習Ⅱにおける対象者とのコミュニケーションに関する学生の認識について課題レポートを通して明らかにする。

I 用語の説明

コミュニケーション：自分の気持、意見などを、言葉や態度・身振りなどを通して、相手に影響を与える程度に交換するもの。一方向ではなく双方向である。

II 研究方法

1. 研究対象

本研究の趣旨に、同意・協力を得た本学の2年次生112名。学生には研究に同意しなくても評価や関係性には影響しないこと、匿名性によりプライバシーは保持されることを説明した。

2. 研究方法

学生が実習終了後に提出した課題レポートを分析した。

3. 分析方法

学生が記述した内容から、対象者とのコミュニケーションについて類似性・共通性のあ

るものを抽出してまとめてカテゴリー化し、内容を示す名称をつけた。

4. 研究期間

平成14年10月から平成15年6月末迄。

Ⅲ 結果

分析の結果、総データ数は664であり、「コミュニケーションの難しさ」「対象者との関係の振り返り」「コミュニケーションを实践」「対象者との良好な関係」「コミュニケーションの意義を再確認」「自己の課題」の6つのカテゴリーと24のサブカテゴリーに分類できた(表1)。図1に各カテゴリーの構成比を示した。

表1. コミュニケーションについての学生の認識

カテゴリー	サブカテゴリー
コミュニケーションの難しさ	緊張感や不安感、戸惑い 会話するタイミングのずれ 会話による相手への影響を懸念 言葉を選択して使うことの難しさ 一方的な会話
対象者との関係の振り返り	コミュニケーション不足 自己の無力さ 一人よがりの言動 相互の関係
コミュニケーションを实践	話を傾聴すること 思いを受け止めること 感じたこと・思ったことを言葉にすること 笑顔での対応 やさしい言葉かけ
対象者との良好な関係	受け持つことの説明の影響 気持の触れ合いを実感 ありのままに見つめること 援助を実施
コミュニケーションの意義を再確認	看護をする上での基本 対象者を理解する方法 人間関係の基本
自己の課題	技術を深めること 看護者としての態度を形成 日常生活の实践

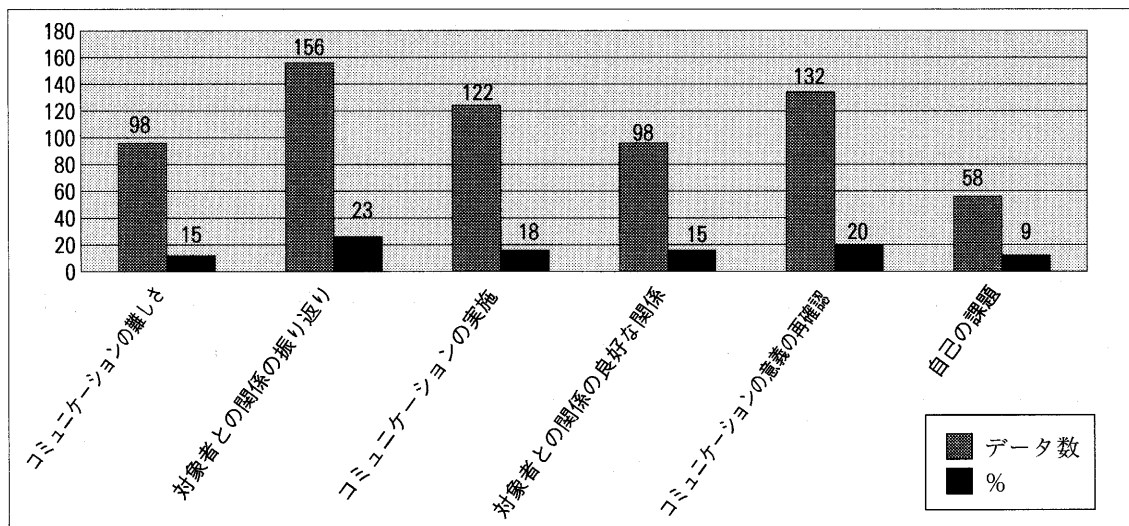


図1. 各カテゴリーの構成比

「コミュニケーションの難しさ」

このカテゴリーは学生が対象者と出会い、コミュニケーションを開始する際の感情や体験から生じた困難さについての認識を示している。これは実習当初にみられ、受持対象者の年齢、健康状態、疾病に影響していた。データ数は98(15%)であり、この中には、『緊張感や不安感、戸惑い』『会話するタイミングのずれ』『会話による相手への影響を懸念』『言葉を選択して使うことの難しさ』『一方的な会話』のサブカテゴリーが含まれた。

学生は初めて出会う対象者に対して、「緊張感から、心に思うことを表現できない」「どのような言葉を使えばよいのかよいかわからず自己紹介するのがやっとだった」など『緊張感や不安感、戸惑い』があった。また、「身体的苦痛がある時に話し掛けてさらに苦痛が悪化するのではないかと思った」「何時言葉をかければよいかというタイミングが難しく、話しかけるチャンスがなかった」「実際に対象者に出会い、何を話してよいかわからずカンファレンスルームにいることが多かった」など、『会話による相手への影響を懸念』したり、『会話するタイミングのずれ』があった。さらに、「話そうと思っても、失礼になってはいけない」「語彙が豊富ではなく、適切な言葉が出てこなかった」や、「話かけたが、自分の聞きたいことだけを質問してしまった」「会話が続き、一方的だった」など、『言葉を選択して使うことの難しさ』や『一方的な会話』等、コミュニケーションすることの困難さについて記述していた。

「対象者との関係の振り返り」

このカテゴリーは、学生が対象者との会話が進まないこと、それが影響して対象者との関係性が築けないことの気づきから対象者と自己の関わりや行動を振り返ったことを示し

ている。データ数は156(23%)であり、この中には、『コミュニケーション不足』『自己の無力さ』『一人よがりの言動』『相互の関係性』のサブカテゴリーが含まれた。

学生は、「カンファレンスの場でコミュニケーション不足では必要な情報が得られないことがわかった」「記録を整理していてコミュニケーションが表面的であり、内容的にも方法としても不足なために、対象者の方に必要な援助を確認することができないと思った」「対象者の前に立って、思ったことを表現できない自分の無力さをみせつけられた」と、『コミュニケーション不足』や『自己の無力さ』について記述していた。また、「自分が情報を得るという目的だけで対象者の状況も考えずに一方的だった」「対象者は話すことを望んでいなかったかも知れないのに一方的に自分の目的だけのために話していた」「一方的な援助をしたのかも知れないのに対象者に確認しなかった。これでは対象者と良い関係は築けない」など、『一人よがりの言動』や『相互の関係性』について記述していた。

「コミュニケーションを実践」

このカテゴリーは、学生が、自身の振り返りや指導者・教員の働きかけによってチームメンバー間での意見で学びを得たこと、看護者の患者への対応を実際に見ることからの学びを得て、対象者とのコミュニケーションを実践したことを示している。データ数は122(18%)であり、この中には、『話を傾聴すること』『思いを受け止めること』『感じたこと・思ったことを言葉にすること』『笑顔での対応』『やさしい言葉かけ』のサブカテゴリーが含まれた。

学生は、「対象者を理解するためには話を傾聴することが大切」「対象者が望んでいることは何かを受け止める必要がある」ことを認識し、実際に「対象者が話したいことを心から聞くようにした」や、「対象者はどんな気持ちなのかを対象者の立場になって考えるようにした」など、『話を傾聴する』『思いを受け止める』ことを実践していた。また、「対象者に対して心に思ったことを言葉にした」「自分が感じたことや考えたことを素直に言葉に出して伝えた」など、『自分の感じたこと・思ったことを言葉にする』ことを実践していた。さらに、「対象者が笑顔で迎えてくれたことで安心できたように、笑顔での対応をした」「看護師さんがされているようにやさしい言葉かけを心がけた」など、『笑顔での対応』や『やさしい言葉かけ』を実施していた。

「対象者との良好な関係」

このカテゴリーは、学生が対象者との関係が維持できたとの認識を示している。データ数は、98(15%)で、この中には、『受持つことの説明の影響』『気持の触れ合いを実感』『ありのままに見つめること』『援助を実施』のサブカテゴリーが含まれた。

学生は、「対象者の受け入れが良く、良い関係ができたのは、指導者の方が対象者に受け

持つことを説明されたからだと思う」「対象者の方が受持を了解されたから、待っていてくれた」「家族も待っていたと笑顔で言われたのは受け持つことを説明されたお陰だと思う」など、『受持つことの説明の影響』について記述していた。また、「対象者と気持が触れ合うようになった。コミュニケーションの大事さを思った」「言葉でのコミュニケーションは出来なかったが、対象者の考えていることを理解できるようになった」など、『気持の触れ合いを実感』し、「対象者の感じていることをそのまま受けとめることが必要」「相手に対して感じていること、考えていることを自分自身が否定しないことが大切」など、『ありのままに見つめること』について記述していた。その結果として、「関係がよくなると援助も受け入れてもらうことができた」「どのように援助すればよいかを相談しながら計画・実践できた」と『援助を実施』したと認識していた。

「コミュニケーションの意義を再確認」

このカテゴリーは、学生が、コミュニケーションの意義や重要性を確認したことを示している。データ数は132（20％）であり、この中には、『看護をする上での基本』『対象者を理解する方法』『人間関係の基本』のサブカテゴリーが含まれた。

学生は、「コミュニケーションは看護するうえでの基本だと思う」「コミュニケーションすることで相手の考えていることがわかる」「人間関係を築く上での始まりだと思う」など、コミュニケーションに対して、『看護をする上での基本』であることや『対象者を理解する方法』であると認識していた。また、「コミュニケーションによって良い関係が維持できる」「表情や仕草、身体的接触などで心は通じるし良い関係が形成できると思う。コミュニケーションは人間関係の基本だと思う」など、『人間関係の基本』として認識していた。

「自己の課題」

このカテゴリーは、学生がカンファレンスや課題レポートを記録することを通して実習における自己の経験を振り返り、振り返った内容を今後の課題としたことを示している。データ数は、58（9％）で、この中には、『技術を深めること』『看護者としての態度を形成』『日常生活での実践』のカテゴリーが含まれた。

学生は、「対象者に適した援助を行うためには、コミュニケーション技術を身に付けることが必要」「対象者と向き合って、対象者の言葉を受け止めるという態度を養う必要がある」など、『技術を深めること』や『看護者としての態度の形成』について、また、「大学生活の中で身近な人との会話で実施する必要がある」「日ごろから人と向き合い、受け止めることを実践していくことが課題」など、『日常生活での実践』を今後の課題としていた。

Ⅳ 考察

本研究では基礎看護学実習Ⅱにおいて学生が認識した受持対象者との関係性に影響するコミュニケーションについての学びを、学生の課題レポートを通して明らかにした。

「対象者と向き合うことの重要性」

実習当初、学生は対象者との、コミュニケーションに対して緊張感や不安感が生じていた。高齢者や健康障害の顕著な対象者を受け持った学生程、その傾向が強かった。学生にとっては初めての病院実習であることに加えて、多くの学生は対象者の年齢や健康障害を持つ人に接するのは初めての体験であり、緊張感や不安感があるのは無理ないことである。また、学生は、会話することで対象者の健康状態に影響を及ぼすのではないかと懸念し、言葉を選択して使うことやタイミングを掴むことの難しさを実感していた。対象者との会話が進まないことから、自己の無力さを思い、対象者の状況を考えられない一人よがりの言動や一方的な会話では、コミュニケーションとはいえず、思いや考えを交換するには至らないこと、それらが影響して対象者との関係性が築けないと認識していた。上野は、看護の役割・使命は、臨床上の意味の具現化つまり援助的理解の表現をめざすところにあるとして、その方法論的基盤として明確にしておかねばならないのが患者と看護師の関係であると述べている⁶⁾。また、援助的理解を実現する一つの方法のなかで、私とあなたとの関係のなかを生きる。話合い(対話)のなかで、話し、聴くことを受けて、これにかかわり私が反応し、応じることが援助的理解の核心をなしている⁷⁾と述べている。

学生に生じた対象者との会話が果たしてこれでよかったのかという不安や、会話が一方的だったと感じている学生は、コミュニケーションは一方的では良い関係が築けず、相手との双方向のコミュニケーションが必要である⁸⁾といわれるように、双方向のコミュニケーションが成立していないことに気づいている。また、言葉として現れた意味だけではなく、対象者が学生に対して感じていることや考えていることがわからないことに視点を当て、対象者との関係はこれではないことを察知し、その歪みに気づいている。学生のこのような気づきは、対象者と向き合っ、しっかりとした話のやり取りのうちに実現される、真に対象者を見つめ、対象者にみつめられ、対象者を知り、対象者によって知られるという、関係の相互作用の重要性への気づきである。学生は、人間関係のあり方がコミュニケーションに影響を与えるし、コミュニケーションによって2人の関係も影響されることを理解しているといえる。

対象者をありのままに見つめたことでコミュニケーションできたと、相手を受け入れることの大切さを認識している学生もいた。誰かが自分の話に耳を傾け、自分の人間的価値を認め、自分の気持を言い表しても咎めだてしないで受容してくれる時、患者は安心感を得るものである⁹⁾。患者を安心させることを抜きにして看護を考えることは難しいといわ

れるが、対象者にとって学生の存在で安心感があると認識するまでには至らないとしても、学生の患者をわかろうとする気持がそこにある。学生の姿勢を感じたからこそ、対象者は学生を受け容れ、学生は対象者との気持の触れ合いを感じられる迄に至ったのだと考えられる。学生が自分の価値観や評価をいれずに、対象者の表情や態度に気を配り、訴えに対して耳を傾け、対象者をわかろうとする姿勢は私達教員も学ぶべきものであり、教員もまた、学生を尊重する態度、学生の気持に耳を傾ける姿勢を持つことの必要性を示唆しているといえよう。今後も学生に対して、対象者とのコミュニケーションは人間的交流が根底にあることを認識できる教育的な関わりが必要である。

「学生への教育的関わり」

看護におけるコミュニケーションは、互いの意見や思想を交換することで相手に影響を与えて、行動変容を促すことまでが求められることに難しさがある¹⁰⁾。また、言葉でのコミュニケーションだけではなく、患者の視線、表情、姿勢、声の調子やタイミングといった非言語的コミュニケーションが重要となる。

前述したように、学生は、実習当初では対象者とのコミュニケーションに対して、不安や緊張感があった。しかし、自分自身の気づきや指導者・教員の指導を受けて、対象者との関わりについて振り返りをし、あるいはカンファレンスでの意見交換による学びの共有によって、対象者との対応のあり方を考えていた。

実習後半においては対象者の話を傾聴すること、思いを受け止めること、自分の感じたこと・思ったことを言葉にすることを実践できるようになっていた。また、対象者や家族に笑顔で向かえられた時の安心感から、笑顔での対応、やさしい言葉かけなどが必要であるとして、それを実践していた。対象者との気持の触れ合いを実感できた学生や、立案した看護計画を、対象者と相談しながら実施していた学生もいた。また、実際に看護師が患者へ対応している様子を見た学生は、看護師の患者への対応の仕方が大きな学びとなっていた。

大半の学生が実習終了時においては、コミュニケーションの意義を理解し、コミュニケーション技術を深めること、看護者としての態度を形成すること、日常生活で実践することなどを、今後の課題としていた。また、対象者と良い関係を形成できたのは病棟側が受け持つことを説明したからであると感謝している学生もいた。このような学生の変化は、指導者や教員が連携しながら、学生の悩みや感じることをそのままにせずに素直に表出できるように方向づけたことに影響していると思われる。

本学では、学生にとって初めての病院実習である基礎看護学実習Ⅱにおいては、木目細かな学生指導が必要であるとして、6、7名のグループメンバーを1つの病棟に配置し、担当教員が1名指導につくという形態を取っている。実習初期において学生は、自身の疑

問や問題点を明らかにすること、情報を整理し統合するという作業が必要となる。中田が、看護者は単独でその場、その場で対象者をすぐにアセスメントして判断を下し、適切な看護を実践しなければならないが、自分の思いだけに頼ったり、独断的な看護実践とならないよう、冷静で客観的な視野を持つことが重要となる¹¹⁾と述べているように、看護学生の時期から客観的な視野を持つことができる指導が重要である。そのためには、対象者の問題を明確にすること、対象者にとっての最善・最良の根拠を選択すること、選択した根拠を対象者に適応することの妥当性を、学内で学んだ知識や調べた文献と比較したうえで判断し、実施する¹²⁾一連の指導が必要であると考えられる。また、中田が、曖昧な判断によってみつけた根拠を、対象者の意見を聞くこともなくそのまま一方的にその対象者に適応させることを避けねばならない¹³⁾と述べているように、対象者のQOLを考えられる指導が重要であり、学生のその時々々の状況における教員の関わりができるためにも今年度の指導体制を今後も継続する必要がある。

V 結論

健康障害を持ち病院に入院している人を対象にした基礎看護学実習において、学生の受持患者との関係性を形成するうえで影響したコミュニケーションについての認識を、課題レポートを通して明らかにした。実習当初学生は対象者と出会って、緊張感や不安感からコミュニケーションを難しさとして認識していたが、実習の進行と共に、コミュニケーションが対象者との関係性に影響することに気づき、自己の振り返りをしていった。また、対象者とのコミュニケーションを実践するなかで、対象者との良好な関係が形成でき、対象者に適した援助ができるようになっていった。実習終了後では殆どの学生が、コミュニケーションの意義を再確認し、自己の課題を見出していた。今後の方向性として、対象者とのコミュニケーションは人間的交流が根底にあることを認識できるような教育的な関わりの必要性が示唆された。

尚、本研究は、「地域における基礎看護学実習の取り組みと今後の課題」の一つとして、平成15年度の学内奨励研究費の助成を受けて行われた。研究の概要は、第34回日本看護科学学会(2003年)において発表した。

引用文献

- 1) 川本利恵子：第1章 コミュニケーションとは 看護実践コミュニケーション、p.2-4、廣川書店、1995
- 2) 二重作清子・谷岸悦子・小島通代：地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題、p.49-59、日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research 1、2002

- 3) 谷岸悦子・二重作清子・本田多美枝・小島通代：地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題—実習に対する対象者の受けとり方と学生の学び—、p.340、第23回日本看護科学学会学術集会、2003
- 4) 二重作清子・谷岸悦子・本田多美枝・小島通代：地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題—実習の学びに対するレポートの分析—、p.132-144、日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research 2、2003
- 5) 二重作清子・谷岸悦子・小島通代：基礎看護学実習における学生と対象者との関係—コミュニケーションからの分析—、p.211、第23回日本看護科学学会学術集会、2003
- 6) 上野直：第4章 看護婦の姿勢、看護実践コミュニケーション、pp.24-25、廣川書店、1995
- 7) 前掲6)
- 8) 吉田哲：看護とカウンセリング、p.97、メディカ出版、1988
- 9) 前掲1)
- 10) 外口玉子：看護学翻訳論文集2 患者の理解 看護婦—患者関係の展開のなかで、pp.130-132、第3版第14刷、：現代社、1994
- 11) 岡堂哲雄・内山芳子：患者ケアの臨床心理、p.7、医学書院、1978
- 12) 中田康夫：EBNとクリティカルシンキング、看護教育におけるクリティカルシンキングをどう活かすか、Vol. 43, No. 11、pp.966-970、看護教育、医学書院、2002
- 13) 前掲12)

参考文献

- ・金子春勇：人間の内なる世界—社会学的考察—、創文社、1992
- ・ブーバー原著 野口啓祐著：孤独と愛—我と汝の問題—、第46刷、創文社、1993